

ロシア民謡と今

尾崎 徹

時代には風潮があり、音楽もまたその風潮に乗って流行と衰退を繰り返していく。

今回選曲した4曲は何れも短調。偶々というよりも曲集に収められたものは圧倒的に短調が多いからである。そもそもロシアの民衆には長調より短調が好まれる傾向があり、また長調の曲が社会的に推奨されなかったし、日本に入ってきた曲がこれまた短調ばかりであったこともある。しかもこの短調の旋律は何故か日本人の好みに合っていたこともあり、戦後シベリア抑留からの帰国者と共に大量にロシア民謡が日本にもたらされてきたときは抵抗無くスムーズに受けられた。またテレビが普及していなかった時代に「うたごえ喫茶」で流行したことも広く歌われるようになった一つの要因である。

しかし昭和40年代から50年代に入り、うたごえ喫茶の衰退と共にロシア民謡も歌われなくなってしまう。その後日本はバブル期を迎え‘イケイケドンドン’の風潮が芽生え始めたのに合わせて一時的にロシア民謡の回顧的風潮も広まり、合唱界でもロシア民謡復活に拍車を掛けようとしていた矢先、ソ連崩壊とバブル崩壊のタイミングも相まって再びロシア民謡暗黒の時代を迎えることとなる。実際、我々が歌うこの曲集（ロシア民謡集Ⅱ）が発刊されたその年にソビエトは崩壊し、それをきっかけに一時的に多くの合唱団がこの曲集を取り上げはしたが、やはりバブル崩壊の流れと共にこれらは歌われる機会も減り、この曲集も休刊に追い込まれていった。

これらの風潮を振り返れば、日本がさあ浮かれてくるぞというタイミングに合わせてロシア民謡も流行りの兆しを見せて来たように思える。時を経た今、もしかするとその時期を再び迎えようとしているのかも知れないが、今回はどうやら昔の浮かれ方とは違う嫌な感触を感じるのは気のせいか…。

話代わって、ロシアには当然一般的な歌謡曲と土地に根付いた民謡とがあるが、これらは所謂純粋な民謡に加え、一般的な流行歌も含め広い意味でロシア民謡の括りとしているのが普通のようなのである。

私達が歌う曲集の1曲目「ポーリュシカ・ポーレ」はもともと交響曲の旋律に歌詞をつけた軍歌だが日本に輸入されたときはラブソングとして紹介された。2曲目「仕事の歌」は『えい、ドゥビーヌシカ（丸太ん棒）だ』と繰り返される労働歌が19世紀後半に革命の歌として改作、「黒いひとみ」はヨーロッパ系ロシア人が作ったジプシー系の歌謡曲、「カリンカ」もまた19世紀に作られた芝居の中の一曲である。4曲何れも作者が特定されており、そうなる私達が通常民謡と呼んでいるそれらとは一線を画すものであり、誰が作ったか分からない、いつの間にかその土地に根付いて歌い継がれた民謡とは言い難いものであるが、これらは何れも激動の時代に揉まれながらも広く歌われ続けている曲には変わらないと言えるだろう。